



**JAPANESE A2 – STANDARD LEVEL – PAPER 1**  
**JAPONAIS A2 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1**  
**JAPONÉS A2 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1**

Tuesday 21 May 2002 (afternoon)

Mardi 21 mai 2002 (après-midi)

Martes 21 de mayo de 2002 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

---

**INSTRUCTIONS TO CANDIDATES**

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A consists of two passages for comparative commentary.
- Section B consists of two passages for comparative commentary.
- Choose either Section A or Section B. Write one comparative commentary.

**INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS**

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- La section A comporte deux passages à commenter.
- La section B comporte deux passages à commenter.
- Choisissez soit la section A soit la section B. Écrire un commentaire comparatif.

**INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS**

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- En la Sección A hay dos fragmentos para comentar.
- En la Sección B hay dos fragmentos para comentar.
- Elija la Sección A o la Sección B. Escriba un comentario comparativo.

問題 A か問題 B のどちらかを選び、答えなさい。

### 問題 A

次の二つの文章の共通点や相違点、主題について論じなさい。またその際、筆者が自分の考えを読者に伝えるために用いている文の構成、語調、言葉の象徴するもの、文体などの要素を考えに入れなさい。

#### テキスト 1 (a)

まだ小学校の低学年の頃、私には、学校への行き帰り、どうしても苦手な一か所があった。

それは通学路の途次、ある大学の研究所構内の細い道で、なぜそこが苦手なのかというと、道のすぐ脇に大きな鳥舎があり、そこに数羽の七面鳥が飼われているからなのだ。前を通りかかるたび、七面鳥は鳥舎の金網の中から、絵本の恐竜じみた形相で、ガーッ、ガーッと私をおどしつける。そしてすさまじい羽音を立てて、私が急ぎ足で通り過ぎるまで、その脅迫を決してやめないのだった。

幼い私にクリスマス料理定番メニューの七面鳥は、ただひたすら恐怖の源だった。ある日の帰り、そこを通りかかろうとすると、どういうわけかその日は七面鳥たちが鳥舎の外に出て、道端にゆうゆうとたむろしているではないか。

遠目に彼らの姿を見た瞬間、私は足がすくみ、その場から引き返しかけた。しかしなぜか、私の意思に反して私の足は一步一步、彼らに近付いて行き、そして案の定、私は七面鳥の群れに、叫び声と羽音の渦と共に一斉に襲いかかられ、文字通り必死の思いで逃げのびたのだった。

今も時々、その時の自分を、不可思議なものとして思い返す。私はなぜあの時、恐怖の群れに、何かの糸にたぐられでもするように、近づいて行ってしまったのだろうか。

幼年の記憶の中に、私はいつも、いくつもの不思議を発見する。そしてその不思議は、私の底に今も流れつづけている。

(辻 章「七面鳥」、朝日新聞コラム「時のかたち」より、2001年)

## テキスト1 (b)

## ○子様

初めて蛇を見たのは、九歳の時、引き揚げて父の田舎に行った時です。「青大将」というのをまず知りました。大将と言われるだけあって、なかなか太く長いのがいました。畑にも土手にも山にもいて、するすると草むらなんかに吸い込まれてゆく。

## 5 (中略)

あちゃんと山へ遊びに行っ、九歳のあちゃんはシマヘビとマムシをまちがわないように非常に用心深く、マムシでないかわかると、むんずとシッポをつかんで目にもとまらぬ速さで空中でぶん回し、あっという間にペシペシと地面にたたきつけると、蛇はダランと一本のひものようになり気絶する。「ヤーこりゃ、青大将だあ、食10えんわ。」 私は今でも小さいあちゃんの輝く早わざに胸がドキドキします。いつか、私もあちゃんのように、ブンブンふり回せる日がくるだろうかと幼いながら向上心を持ったことがなつかしい。

のびた蛇を私はしゃがんで見ずにはいられませんでした。小さな小さなウロコがびっしりしっぽまで連なり、自然にうろこがもっとも小さく並んで消滅したところ15が蛇の体の終りで、その中に黒っぽい縞が整然と混入している精巧さは神秘的でした。

「死んだの」と聞くとあちゃんは「死んだふりしてるだヨウ」とスタスタ歩み去る様は正に達人の風格がありました。

少しあたたかくなると、1メートル半くらいの長い青大将が私の家の庭を横切っていきます。毎年横切っっていく。まだ芝生が茶色い時です。そして、生けがきのそばに20脱皮した皮が残っていることがあります。そっくり首から下が蛇の形の完全な姿でカサコソと音がします。

ある日、ガラッと音をたててガラス戸を開けると茶色い芝生の上に太い長い木の枝が置いてありました。こんな太い枝どこから飛んで来たんだろうとよく見ると、蛇でした。蛇が固まって、死んだふりをしているのです。ガラス戸の音で、危険を察知し25たらしい。私はいつ動き出すのか、しゃがんで見始めました。蛇は動かない。そのうち、黄色くなっていくのです。本当の枯れ枝のふりをしている。私はそっと立ってうしろに移動し、3メートル位移動した時、蛇は突然、青大将の色になってニョロニョロと動きだし、私はダダッとガラス戸のところまで行くと、また、死んだふりをする。

その時上の方で鳥が横切りました。一瞬私は空のほうを見てしまいました。芝生を30見た時、枯れ枝も蛇も消えていました。私が目を一瞬離したと、どうして蛇は知るのでしょう。

○子さん、もしも人生の危機に面したら、死んだふりをしましょう。いかなる不幸も一瞬目を離すときがあるにちがいない、どんなにガンコな不幸も油断するにちがいない。その一瞬をつるつると逃げて、生きのびましょう。

(佐野洋子「死んだふり」、『あれも好き、これも嫌い』より、2000年)

## 問題 B

次の二つの文章の共通点や相違点、主題について論じなさい。またその際、筆者が自分の考えを読者に伝えるために用いている文の構成、語調、言葉の象徴するもの、文体などの要素を考えに入れなさい。

### テキスト 2 (a)

「なぜ子供は学校に行かねばならないのか」

ノーベル賞作家の大江健三郎さんの書いた一文を巡って、大江さんと中学生が熱く議論している。舞台は、原稿用紙。生徒が書いた感想文に、大江さんが添削しながら、返事を書いているのだ。

5 初めに、大江さんの文章の概略を紹介しよう。大江さんは、これまでの人生で二度そのことを考えた。初めは戦争直後の十歳の秋。「天皇は『神』、アメリカ人は『鬼か獣』」と教えていた先生たちが急に逆のことを言い始めたときだ。次が大人になってから、障害を持った長男の光さんが初めのうち特殊学級になじめず、身体を堅くしていたとき。そのつど悩みながらも、自分の母親の言葉や、光さんの成長を通して大  
10 江さんが出した答えは、「学校とは、自分が自分を理解し、社会につながっていくための、一番役に立つ言葉を習いに行くところだ」と言うものだった。

これを読んだあ すべる中三の女子学生は作文でこう書いた。「確かに学校へ行くことで他人とつながってゆく術、つまり社会性を身につけることができる、しかし、今の日本の学校の多くは他人とつながることの苦しさの方ばかり感じさせている気がする」

15 それに対して、大江さんの赤ペンはこう答える。「それではどうするか。もう一度最初に戻って、考えて見ると、次の、自分の進む地点での考えが出てくると思います。考え続けることをして下さい。それのできる人です」(中略)

この大江さんの一文は実は、この夏出した『自分の木の下で』の最初の文章である。自身、「初めて子どもに向けて書いた」というこの本は、四国の森の中で過ごした少  
20 年時代や家族との思い出に触れながら、学校に行く意味、生きていくことの意味をやさしく語る。この本が今、教育現場や若い母親たちの間で話題を呼んでいる。不登校、いじめ、学級崩壊、校内暴力など、学校にまつわる負の情報があふれる中で、「なぜ行かなければならないのか」という問いがより切実になってきているのだろう。

「子どもと対話始めた大江健三郎さん」

(週刊誌『アエラ』より。2001. 9.)

## テキスト 2 (b)

女の子は十二、三の頃からお縫い子として、裁縫のお師匠さんに弟子入りします。千世が始めて裁縫のお師匠さんについてのは川崎町の石川富右衛門という老藩士の奥さんのところでした。そこは身分の低いごく貧乏なお侍でしたから、ご主人も息子さんも傘張りの内職、お嫁さんは賃機を織っていました。お縫い子は十人ばかり、そのうち二三人は同心や町人の娘でした。千世は一番はじめに雑巾をさし、それが一通りすむと足袋の底を刺しました。言うまでもなく、そのころの足袋は全部手縫いでしたが、底を丈夫にするための厚地の物を縫っても、針目がそろそろ稽古に足袋底をささせるのでした。その初めて刺した足袋の底は片方は縮んで小さく、片方は大きく、ちんばに出来上がりました。これは最初縫ったほうは糸がよくくけていなかったからで、10何度もくり返して足袋底ばかり稽古するうちに両方とも自然に大きさがそろそろようになりました。それから袖口や褌の稽古。そしておいおいに着物も仕立てられるようになりました。

このお師匠さんのご主人は六尺ゆたかの、頭の禿げた大きなおじいさんでしたが、自分の家にくるお縫い子が大のご自慢で、仕立物にかけては自分の内のお弟子に叶う15ものはいないという自信を持っており、可愛くてたまらぬという風でした。

着物を一枚仕立て上げると、お師匠さんは、「それでようござんすからおじいさんの所へもっていらっしゃい」と言います。おじいさんの部屋へ持っていきますと、内職の傘張りの手を休めて、「どれどれ」と仕立物を手にとり、どうせ分かるはずもないのですが、いかにもまじめな、心得ているような顔付きで、褌をいじったり、おく20みの剣先を調べてみたりした上で、「結構です。よくできました。おめでとう」と褒めて祝ってくれます。それから、「それでは私が霧を吹いてあげよう」と言います。そのころの着物は手織りもめんですから縫っている間に皺だらけになるので、仕立てあげると霧を吹くことになっていました。おじいさんは、毎日傘を張っては吹くので、霧吹きは慣れたもので確かに名人です。大きなお爺さんが大きな口に一杯水をふくん25で、パーッと吐きますと、ほの白く透き通る薄絹をサッと広げたようにきれいな霧が立ちます。おじいさんに、お礼を言って部屋へ帰り、仕立物をお師匠さんの前において手をつき、「おじいさんがこれでいいとおっしゃいました」と報告します。そこで初めてお師匠さんも「おめでとうございませう」と祝ってくれ、ここでまたお礼をいい、それから友達一同に向かい、仕立物を前において、「みなさん、ありがとうございます30した」というと、口々に、「おめでとうございませう」と言ってくれるのでした。

(山川菊栄『武家の女性』、「お縫い子として」)

注 山川菊栄(1890-1980) 評論家。主な著書に『幕末の水戸藩』などがある。

千世は、水戸藩の儒学者の娘で、菊栄の実母。当時の下級武士は貧しく、副業として、傘作りの仕事などをしていた。